

特定非営利活動法人 あおもりみなとクラブ

みなとまち青森 400 年に学ぶ商店街と地元高校生による博学連携活動「クリエイトまち塾2025」の展

開



【事業の内容・目的】

- 青森開港 400 周年を機に、博物館を核として NPO や地元企業等が連携し、高校生 30 名を対象とした博学連携プログラム「クリエイトまち塾 2025」を開講した。地域人材の育成を主目的に、みなとまちの歴史や海洋環境を学ぶ体系的なスキームを構築し、先駆的なモデルケース化に取り組んだ。
- 全 10 回の講義や函館への視察を通じ、海と地域の関わりを多角的に学習した。実践活動では、漂着アマモを活用した石鯛作りの出展や、小中学生向けの藻塩作り体験など計 5 件を実現し、地域資源を活かした具体的な学びの場を創出した。
- 最終成果発表会では、中心商店街の活性化に向けた 4 件のアクションプランを提示した。本事業を通じて、みなとや海を活かしたまちづくりへの意識を醸成し、次世代を担う若者の育成と、地域連携による社会教育プログラムの定着を実現した。

活動の様子

1. 「みなとまち青森 400 周年」プロジェクトの主体的実践

【開催日時】2025 年 09 月 27 日（土）ほか

【開催場所】青い海公園、AOMORI STARTUP CENTER、青森駅ほか

【参加者数】324 名（ワークショップ参加者およびイベント来場者等）

【活動内容・目的】

- 漂着アマモを活用した石鯛づくりワークショップを通じ、漂着物を資源として再利用する体験を提供し、海洋環境の保全と「海」の恵みを活かす重要性を学ぶ目標で実施した。
- 商店街での学習スペース運営や交流イベントの開催、伝統工芸モチーフのアート展示等を通じ、港に隣接する中心市街地の活性化を「みなとまち」の独自の価値として再認識することを目標とした。
- 地域資源を PR するカプセルトイの制作・販売実践により、地元の商業開発と連携した具体的な社会参画を経験し、海を軸とした持続可能なまちづくりへの意識を高めることを目標とした。
- 小学生とその保護者を対象とした、土器を使った藻塩づくり体験などの親子で体験縄文クッキングを実施した。



※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

海岸の厄介者である「漂着アマモ」をあえて教材に採用し、炭化・灰汁抽出を経て石鹼を制作するプロセスを実践した。これにより、単なる清掃活動に留まらない「環境保全と資源循環」の仕組みを体感した。さらに、小学生向けの土器を使った藻塩づくり体験の講師役を務めることで、海がもたらす恩恵と塩害という二面性を理解し、自然共生への深い洞察を得る「海の学び」へと繋げた。



伝統工芸（津軽びいどろ等）や商店街の個性をキャラクター化し、JR 青森駅等でカプセルトイをテスト販売する社会実装に挑戦した。企業や商店街と連携し、アイデアを形にする過程で、海を通じた交易が育んだ「工芸」や「商習慣」という無形の地域資源を再定義した。地域資源をクリエイティブに発信する経験は、将来にわたり「海という資産」を活かして地域を牽引する、当事者意識の涵養に直結した。

【参加者の声】

- 海岸の厄介者だった漂着アマモを炭化させ、石鹼の原料として再利用する工程に驚きました。ただゴミを拾うだけでなく、海の負の側面を地域の資源に変える発想を得たことで、環境保全への向き合い方が変わりました。
- 商店街での活動を通じ、港の発展が街の文化や伝統工芸を育んできた歴史を肌で感じました。海は眺める対象ではなく、私たちの暮らしや経済の基盤であることを再認識し、この景色を次世代に残す使命感を感じました。

2. 青森市のまちづくりに関連する勉強会の開催

【開催日時】 2025 年 8 月 1 日（金）～ 2026 年 03 月 1 4 日（土）

※全 10 回・月 1 回程度開催

【開催場所】 青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸 多目的室、青森市中心商店街内公共施設

【参加者数】 194 人

【活動内容・目的】

- 「みなとまち青森」の未来をテーマに、地域資源の活用や政策立案を専門家から学ぶ講義と、参加者同士のワークショップを組み合わせた双方向型の学習を実施した。
- 八甲田丸などの海に関連する施設を会場とし、歴史的背景を肌で感じながら「海とまちの関わり」を多角的な視点（商業・環境・国際戦略等）で捉え直すことを目標とした。



月1回の定期的・継続的な勉強会を通じて、単なる知識の習得に留まらない「探究のプロセス」を構築した。具体的には、青森港の暮らしを支える実行委員長やグローバルに水産業を展開する地元企業の担当者など、多様な講師陣から「地域資源（海）をどう価値化するか」という実例を学んだ。参加者は、八甲田丸という象徴的な場所で議論を重ねることで、港が街の経済や文化に与えてきた影響を構造的に理解。このプロセスを経て、最終的には「海という資産」を活かした具体的なアクションプランを立案できるまで、視座を高める学びを実現した。

【参加者の声】

- 八甲田丸での勉強会は、青森が「みなと」を中心に発展した歴史を肌で感じる貴重な体験でした。専門家の講義を通じ、海洋環境を守ることが街の経済や文化を守ることに直結しているという構造を深く理解できました。
- 月1回のワークショップで仲間と議論を重ねるうちに、海をテーマにした課題が自分事になりました。論理的な考え方やプレゼン術を学んだことで、海を活かした街づくりのアイデアを形にする自信が湧いてきました。

3. 先進地域へのフィールドトリップ

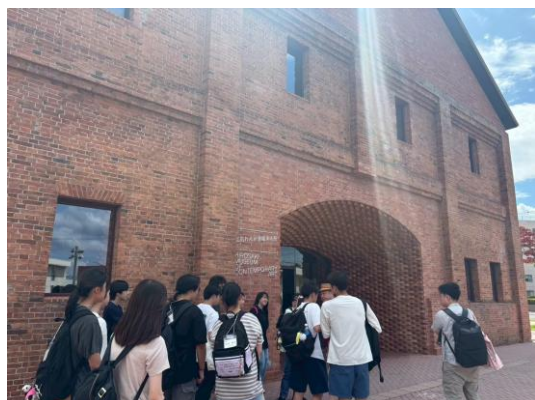
【開催日時】2025年08月17日（日）・2026年02月22日（日）

【開催場所】青森県弘前市、北海道函館市（青函連絡船記念館摩周丸ほか）

【参加者数】32名（弘前25名、函館7名）

【活動内容・目的】

- 青森市と歴史的・文化的に繋がりの深い弘前市と函館市を訪問し、現地でのフィールドワークやキーパーソンとの対話を通じ、客観的な視点から「みなとまち青森」の価値を再発見することを目標とした。
- 特に函館市では、摩周丸の見学や市街地調査を行い、海が果たしてきた歴史的役割を比較学習することで、海洋環境や港湾資源を活かしたまちづくりを主体的に捉える意識の涵養を目標とした。



「比較」と「客観視」のプロセスを通じ、自地域の特性を深く理解する学びを展開しました。具体的には、弘前市で市民参画型の観光手法を学び、函館市では青函連絡船摩周丸の視察や専門家による街歩き解説を実施。函館商工会議所関係者とのディスカッションでは、青森市と共通する歴史を持ちながら異なる発展を遂げた函館の事例から、海的重要性を多角的に考察しました。これらの現地体験により、青森港を単なるインフラではなく、地域を繋ぎ未来を切り拓く「生きた資源」として捉え直すプロセスを実現しました。

【参加者の声】

- 弘前や函館で活躍する若手キーパーソンの熱意に触れ、自分たちも「みなとまち」の未来を担う一員だと強く感じました。現場を自分の目で見て歩くことで、海や地域活性化を自分事として捉えることができました。
- 函館で摩周丸を見学し、同じ青函連絡船の歴史を持ちながらも異なる街づくりの姿に驚きました。他地域と比較することで、みなとまち青森が持つ独自の魅力や、海を活かした街づくりの可能性を客観的に捉え直すことができました。

4. 商店主を巻き込んだ青森市のまちづくりに関する企画立案

【開催日時】2025年8月1日（金）～2026年03月14日（土）

※全10回・月1回程度開催

【開催場所】青森市中心商店街各所

【参加者数】延べ194人

【活動内容・目的】

- 高校生31名を4グループに分け、地元商店主や大学生が伴走しながら、青森港に近接する中心商店街の活性化に向けアクションプランを策定。
- 「みなとまち」の地域資源を再定義し、学生の学習スペース提供や伝統工芸の活用、カプセルトイによるPRなど、海と街の繋がりを活かした具体的な解決策の立案を目標とした。
- 一年間の勉強会や視察で得た知識を、実際の街の課題解決に落とし込むプロセスを通じ、主体的な地域参画と多角的な「海の学び」を自らの学びに





異世代間の対話と試行錯誤を繰り返す「社会実装への挑戦」を学習プロセスの中核に据えました。地元商店主を「担任」として迎え、実社会の厳しさや視点を取り入れながら企画を練り上げることで、教科書的な知識を「生きた知恵」へと変換。具体的には、青森港の交易が育んだ「伝統工芸」を現代の感性でアート化したり、港に近い商店街に若者の居場所（STUDY BASE）を創出したりするなど、海を起点とした独自の都市価値を企画に反映させた。成果発表会での外部評価を経て、自分たちの提言が「みなとまち」の未来を動かす力になるという確信を得る、深い学びのサイクルを実現した。

【参加者の声】

- 商店主の「担任」から商売の厳しさや視点を教わり、自分のアイデアが形になる難しさと楽しさを学びました。港に近い商店街の歴史と、現代の若者のニーズを掛け合わせることで、海を軸にした新しい街の姿が見えました。
- 伝統工芸をアートとして捉え直すなど、青森の「当たり前」を価値に変えるプロセスを経験しました。仲間と議論を尽くす中で、海が育んだ文化をどう次世代へ繋ぐべきか、自分なりの答えを見つけることができました。

5. 「みなとまち・青森の未来を考えるシンポジウム（成果発表会）」の開催

【開催日時】2026年03月14日（土）13:00～16:30

【開催場所】ねぶたの家 ワ・ラッセ イベントホール

【参加者数】121人

【活動内容・目的】

- 1年間の集大成として、高校生自らが考案した「みなとまち・青森」を活性化させる4つのアクションプランを、副市長や有識者、市民の前でプレゼンテーションした。
- 地域資源論の専門家による基調講演や、海洋環境とまちづくりをテーマにしたパネルディスカッションを通じ、海を起点とした都市発展の歴史を学術的・客観的な視点で補完することを目標とした。
- 自らの提言を社会に発信し、多世代からのフィードバックを受けることで、海という地域資源を守り活かす責任感と、次世代リーダーとしての当事者意識を確立することを目標とした。





「学びのアウトプットと社会との接続」を最終プロセスとして実施した。単なる企画発表に留まらず、宮城大学の佐々木教授による地域資源論の講義を組み合わせることで、自分たちが取り組んできた活動が「みなとまち青森」の発展や、海との学びにといかに密接に関わっているかを裏付ける機会となった。また、卒業生とのディスカッションを通じて、高校時代の「海の学び」が将来のキャリアや社会貢献にどう繋がるかを具体化。一般市民を巻き込んだ公開の場で発表した経験は、生徒たちにとって「海と共に生きる街」の未来を創造する主体者としての自覚を深める、極めて教育効果の高いプロセスとなった。

【参加者の声】

- 佐々木教授の講演を聴き、自分たちの活動が「地域資源論」という学問に裏打ちされていると知り感動しました。海を基盤とした都市の発展と、環境保全が両立する持続可能な街づくりの重要性を論理的に理解できました。
- 副市長や一般の方々の前で発表し、自分たちの提言が「街の未来」として真剣に受け止められる手応えを得ました。海という地域資源を守り活かす責任を再確認し、これからも「みなとまち」の一員として行動し続けたいです。

【事業全体のまとめ】

本サポート事業の活用により、博物館を核に NPO、商店街、地元企業が結集する重層的な連携体制が構築された。年間 10 回の勉強会や他県への視察など、従来を大きく上回るボリュームと専門性の高いクオリティを兼ね備えたプログラムが実現し、社会教育の手法として高度なモデルを提示した。

単なる座学に留まらず、漂着アマモの石炭化や商店街での社会実装といった「動的なプロセス」を重視したことで、参加者は海を「守るべき環境」かつ「活かすべき資源」として多角的に捉える「海の学び」を深化させた。「海があるからこそその青森」という当事者意識が醸成され、次世代を担う若者が港から街の未来を共創する、持続可能な教育スキームを確立した。

主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. みなとまち・あおもり誕生 400 年実行委員会	プロジェクトの運営の支援、式典・シンポジウムへの協力
2. 函館市青函連絡船記念館摩周丸	フィールドスタディにおける見学
3. 函館商工会議所	フィールドスタディにおける講師派遣
4. 青森公立大学	勉強会における講師派遣
5. 特定非営利活動法人あおもり若者プロジェクト クリエイト	プロジェクト全体の運営支援
6. 青森「海の学び」博物館連携活動プロジェクト運営協議会	周知協力
7. 青森市内高等学校（13校）	周知協力
8. JR東日本青森商業開発	実践活動の協力
9. 青森市新町商店街振興組合	周知協力・実践活動の協力
10. 昭和通り振興会	周知協力・実践活動の協力
11. 公立宮城大学	成果発表会における審査員・講師派遣

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 東奥日報朝刊	商店街に交流の場を 「クリエイトまち塾」の一環(2026年3月3日付)
2. 東奥日報朝刊	地域の魅力 伝統工芸で発信 高校生がアート制作 (2026年2月11日付)
3. 朝日新聞朝刊	青森っぽい斬新な缶バッジガチャ人気 高校生が商店街活性化で発案 (2026年2月25日付)
4.	
5.	

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。